

第5分科会

【主 題】保育における「暗黙のルール」と子どもの声の狭間で

指導助言者 濱田祥子（比治山大学）

司会者 村本萌（谷の百合幼稚園）

発表者 小橋遥（福山りじょう幼稚園）、馬田かおり（廿日市聖母マリア幼稚園）、
村本萌（谷の百合幼稚園）、森崎由麻（西条幼稚園）、
白石麻奈（めばえ幼稚園）、金森有紀（認定こども園西部めばえ）

記録者 濱田祥子（比治山大学）

記

1. 発表の概要

(1) 主題設定理由

本分科会では、広島県私立幼稚園連盟の教育実践研究会における研究を発表する。メンバーは、令和6・7年度の研究会に参加している6園6名の幼稚園教諭である。私たちは令和6年4月より1年間にわたり、計6回の保育カンファレンスを重ねてきた。その対話の中で見えてきたのは、自身あるいは自身が所属する園にとっての当たり前が、他の保育者や他園にとっては当たり前ではないということである。例えば、ある園では「雨の日は外で遊ばずに室内で過ごす」ことが当然である一方、他の園では「どうして雨の日に外へ出たらいけないの？」という疑問が生じるなどである。こうした具体的な事例を語り合うことで「本当にこれでよいのか？」「なぜ私はこうしているのか？」といった問いが次々と生まれていった。

そこで、保育実践の背景にある、明文化はされていないが確かに存在する慣習、すなわち「暗黙のルール」や「隠れたカリキュラム」に着目することとした。これらは、本来は子どもの権利を保障するための文化として根づいているはずであるが、時として、「今」の子どもの声とズレが生じることもある。保育者は、園に根づいた文化と目の前の子どもの声との狭間に立っている。狭間にいるからこそ、保育は魅力的であり、悩みも尽きない。



(2) 暗黙のルール・隠れたカリキュラムとは

「暗黙のルール」とは、明言あるいは明文化がされていない規則、皆が暗黙のうちに従っているルールなどを指す（weblilio 辞書）。その存在自体は否定的なものではなく、理解し、従うことによって社会生活が円滑になる。ただし、暗黙のルールの内容が常に正しいとは限らず、本当に必要かどうかを吟味する姿勢が求められる。

教育の場面では、これが「隠れたカリキュラム」として捉えられる。文部科学省による「人権教育の指導方法等の在り方について 第1章第1節3人権感覚の育成を目指す取組」では、「教育する側が意図する、しないに関わらず、学校生活を営むなかで、児童生徒自らが学びとっていく全ての事柄」と定義されている。そして、「学校・学級の「隠れたカリキュラム」を構成するのは、それらの場の在り方であり、雰囲気といったものである。」としている。日本では、初等教育以降を対象とした議論は多くみられるが、幼児教育に関する論考は十分とはいえない。

実践に即して考えると、園ごとに異なる「当たり前」が存在する。例えば、以下のような事柄である。

- ・ 子どもが何かをするときは保育者の許可を得る（「～していい？」）。
- ・ 子どもの描く絵に「もっと〇〇したら？」とアドバイスをする。
- ・ 雨の日には室内で過ごす。
- ・ 園庭で他のクラスが遊んでいたら、混ざらない。
- ・ 他のクラスの保育室には入らない。
- ・ 仕事を休んだ後の出勤の際にはお菓子を配る。

これらを良し悪しで判断するのではなく、それが子どもや保育者にどのような影響を及ぼしているのかを考えることが得ることこそが重要である。

本研究会では、「暗黙のルール」や「隠れたカリキュラム」の観点から自園や自身の保育を振り返り、子どもや保育者にとってよりよい実践を探求した。以下に、7つの実践を紹介する。

(3) 実践紹介

【こちらのご都合？】

① 待ち時間を楽しむ

日々の保育の中で生まれる「すき間の時間」や「待ち時間」は、多くの場合、保育者の都合によって過ごし方が決められていることがある。発表者は、2歳児クラスでの保育において、おやつを早く食べ終えた子どもたちがトイレへ行くまでの間、絵本を読んで待つという、これまで引き継がれてきた「当たり前」の流れを行っていた。しかし、それは、「絵本を読んで“おけばいい”」という、静かに、安全に、次の活動へ移りやすいという保育者側の意図が優先されたものであるように感じられた。そこで、子どもにとって本当に有意義な時間なのだろうかとの疑問を持つようになった。

その後、教育実践研究会での意見交換をきっかけに、「待ち時間を楽しめるものにする」ことを目指して、絵本以外の遊びの選択肢を増やす取り組みを始めた。ひも通しやジャンプ遊び、トンネルくぐりやエアパッキン遊びなど、多様な活動を取り入れた結果、子どもたちが自分でやりたいことを選び、待ち時間を楽しむ姿が見られるようになった。それだけではなく、短い時間の遊びの中にも子どもたちの興味や発達のヒントが表れ、他の活動や日々の保育へとつながっていくことに気付いた。

今回の経験を通して、発表者は「今までこうしていたから、こうあるべきだ」という保育における「暗黙のルール」に自分自身がとらわれていたことを実感した。そして、これまで通りの保育では見過ごしていた子どもの姿を知ることができた。園での「当たり前」は必ずしもそうである必要はなく、一度立ち止まって見直すことが大切であると学んだ。これからも、今の子どもたちに目を向けながら保育をしていきたいと考えている。



② 子どものやりたいを実現したいのに… ～ダイナミックとルール～

発表者の園では一斉保育を行っており、保育内容は保育者がねらいや願いをもって計画している。そのなかで、子どもの主体性を尊重する取り組みの一步として「やり

たいことでしっかり遊ぼう DAY」を設けることにした。初めての試みであったため、年長児クラスの子どもたちにやりたいことを尋ねてみた。すると、「サッカー対決」「おにごっこ」「お化け屋敷作り」など多くの意見が出た。その中で最も人気が高かったのは、「絵の具で大きなものに思いっきりお絵かきしたい！」という声であった。日頃から絵の具が大好きな学年であり、その願いを叶えようと活動を始めた。

1 回目は、新聞紙と大きな紙を床に敷き、自由に描ける場を設定した。しかし、やがて絵の具は床に垂れ、子どもたちはそれを踏み、足跡があちこちに広がってしまった。楽しそうではあったが、掃除の負担が大きく、続行不可能で終了となった。2 回目はビニールシートを広く敷いて、お化け屋敷の小道具作りに挑戦した。しかし、ビニールが滑りやすくすぐにぐちゃぐちゃになった。筆洗いや絵の具の扱い方にも課題があり、また大混乱で終了となった。3 回目は段ボールを敷き、床と机に分かれて活動してみた。しかし、大きな改善は見られず、ロッカーや廊下にまで絵の具が広がる事態となった。

現状の課題としては、①子どものダイナミックな表現を受け止めきれていない予測の甘さ、②繰り返しの経験が行動の変化に結びついていないこと、③掃除は誰かがしてくれるという認識のままであること、④掃除等の負担が大きく継続性に欠けること、などが挙げられる。子どもたちの自由な表現を保障しながらも、保育者にとっても無理のない活動や環境づくりの試行錯誤の最中である。

【子どもも大人も楽しむ土台】

③ トイレトレーニングは家庭？幼稚園？

2025 年 4 月、小さくてかわいい年少児 19 名が入園してきた。そのうち 11 名がオムツを着用しており、例年に比べると多い人数であった。保護者との面談では「7 月のプールを目標に頑張りましょう」と声をかけていたが、実際に保育が始まると、オムツ替え自体を嫌がる子どもが多く、想定以上に難航した。一部の子どもは早期にパンツへ移行できたが、大半は進まず、5 月の家庭訪問でも家庭でのトイレトレーニングが十分に進められていない様子が見受けられた。保護者からは「子どもがやる気になっていない」「間に合わなければ仕方ない」といった声もあり、園だけの支援の限界を感じた。さらに 6 月には満 3 歳児が 4 名加わり、オムツを着用している子どもが 12 名に増加した。トイレの時間は約 15 分かかり、保育者 2 名が付きっきりにならざるを得ず、他の保育活動にも支障が出始めた。

例年はトイレが完了していない子は、たらいで水遊びをして過ごしている。しかし、今年はプールに入れないう子が例年より多かったため、やむを得ず保育室で過ごすこととなった。保護者には手紙や参観などの機会を通して再三伝えたが、プールが始まっても突然パンツで登園し、プールに入れると思っていた家庭もあり、認識のズレが大きかった。一方で、「プールに入りたい」という気持ちから一気にパンツへ移行した子どももあり、保護者の考え方や関わり方で子どもの成長が大きく変わることを実感した。トイレトレーニングは園だけでは完結しない。保護者と園の連携こそが、子どもの生活を支え、遊びを楽しむための基盤となることを感じた 1 学期であった。

④ Yくんだって大切な仲間

～「聴く」を通して「対話」し「理解」しあうクラス作り～

今年度、発表者は個性豊かな32名の年長児を担当することになった。中でも印象的だったのが、クラスで気になる存在となっていたYくんである。Yくんは自分の欲求が強く、周囲の状況に左右されず行動するため、トラブルのたびに「Yがやったにちがいない」と決めつけられていた。クラスの子どもたちには、「聴く」力や「対話」の力が十分に育っておらず、一方通行の関わりが目立っていた。Yくんを受け入れられない背景には、こうしたクラス全体の仲間関係も影響していると感じ、クラス全体で心の通い合う関係づくりを始めることにした。



まず始めたのが「サークルトーク」である。全員の顔が見える環境でお互いの話を聴くことを大切にしたが、それぞれが自分の言いたいことを言い、うまくいかなかった。そこで、教育実践研究会で相談したところ、「友だちのいいところを見つける」というアイデアをもらい、早速取り入れてみた。ところが、Yくんについては「今日は叩かなかったからよかった」などの減点法的な発言が目立ち、心から相手を理解する姿には至っていなかった。

そこで、自分の嬉しいなと感じる言葉を伝え合うことへ切り替えると、「かわいいうって言ってもらったらうれしな」「俺はかっこういいの方がうれしい」と発言するうちに「〇〇くん毎日ご飯全部食べてえらいよね」「怖いことがあっても驚かんけえすごい強いよね」とお友達を褒める姿が自然と現れた。そんな中、これまでサークルトークに積極的に参加していなかったYくんが手を挙げ「僕はみんなから「だいすき」って言われたい」と初めて自分の気持ちを言葉にした。すると、クラスの子どもたちはまっすぐに伝えてきたYくんに驚くとともに、すぐに「だいすきだよ」と伝えたり、Yくんを抱き着いたりした。子どもたちもYくんがそんな風に思っているとは想像しておらず、初めてYくんのみんなと仲良くしたいという気持ちが伝わってきたようだった。このやりとりを通してYくんの表情は柔らかくなり、これ以降、Yくんは給食やサークルトークなどの集団での活動に参加するようになった。相手の気持ちを「聴く」ことで対話が生まれ、理解が深まる。今後も子どもたちと共に、温かなクラスづくりを進めていきたい。

⑤ ともだちがともだちをかえる

担任を務めたクラスについて、暗黙のルール視点から仲間関係を振り返り、「ともだちがともだちをかえる」というテーマを実感する出来事があった。クラスには、気持ちの切り替えが難しく、言葉での表現が苦手なAくんが在籍していた。Aくんは創造的な活動を好む一方、集団での活動や人前に立つことにはなかなか興味を示さず、不安や葛藤を行動で表現する姿が多く見られた。また、他の子ども達は、「先生、聞いて!」「先生、でき〜ん!」と保育者に関わりを求める姿が多いクラスであった。そのためか、周囲の子どもたちには「Aくんは〇〇しちゃう子」というイメージが固定化されていたように思う。

発表者は、他の子ども達のAくんへのイメージを変え、Aくんには友達との関わりを楽しんでいると感じてほしいという願いから、クラスで様々なことを話す機会を設けた。

そこで、A くん言葉にならない思いと一緒に考える中で、子どもたちは少しずつ A くん気持ちに寄り添うようになった。「どうしたの?」「一緒にやってみよう」といった声かけが自然と増えていき、A くん自身もその優しさに触れる中で、気持ちを言葉にする姿が見られるようになった。

そんなある日、作品展に向けて製作した大きな船を A くんが誤って倒してしまった。すると、A くんは自ら修理を試み、友達と協力して完成させた。そして、「ごめんね」「ありがとう」と素直に言葉で伝えることができた。A くんはもちろん、周囲の子どもたちも、自分主体の気持ちから相手の立場から考えるようになっていた。子ども同士の関わりが、お互いを変え、クラス全体の関係性をも変えていった一年であった。

【できない、やりたくないはそのままでもいいの?】

⑥ —「やりたくない」が「やりたい」に変わる、ともだちの大きな力—

新年度が始まり、子どもたちの中には、「やりたい活動」と「やりたくない活動」がはっきりしている様子が見られた。特に、「できないからやりたくない」「失敗したくないからやらない」といった声が多かった。その様子に、「一緒にやってほしい」「クラスの一員だから…」という保育者の想いが強すぎるだろうか、でも、本人や周りの子どもの気持ちはどこへいったのだろうかと思われ動き、悩む日々であった。

やりたくない理由は様々であるが、クラスの子供達は「やりたい」の裏側にある「難しいから」「できないから」「分からないから」というネガティブな気持ちとの葛藤に苦しんでいるのではないかと感じた。そして、きっと心の中では「やりたい」と思っている子もいるのではないかと思われた。例えば、ひらがなへの苦手意識が強かった A くんは、ひらがなに自身のある友達の励ましや手助けを通じて、「自分で書きたい」と意欲をもてるようになった。また、大縄跳びで失敗し落ち込んだ B くんも、友達の声援に背中を押され、見事に跳べるようになり、みんなで抱き合って喜びを分かち合った。さらに、製作で理想が高く失敗を恐れていた C くんは、友達に頼ることで、やりたい気持ちをつなぎとめることができた。

こうした事例を通して、保育者だけではなく、子ども同士が認め合うことで、苦手を乗り越える力になり、自分の力が友達の役に立つことでさらなる自身につながるのだと考える。発表者は、「やりたくない」が「やってみよう」に変わる瞬間を何度も目にした。これからも、「ともだちだいすき」が生み出す様々な力を信じて、活動が「できる」か「できない」かではなく、それぞれの「やってみたい」という気持ちを子ども達と一緒に引き出していきたい。共に葛藤し、喜び合い、達成感を味わうことができるのが集団生活のよさだと感じている。

⑦ 「できない」が「やりたい」に変わる瞬間

年中組の1学期、当園ではホチキスの導入を行っている。初めて扱う道具に戸惑い、「できない…」と涙を流す子どもの姿もあった。当初の発表者は、決められたカリキュラム通りの保育に迫られ、自由な発想や挑戦を取り入れる余裕がなかった。しかし、保育を重ねる中で、子どもたちが「やってみたい!」と思える環境づくりの大切さを実感するようになった。

2年後、再び年中組を担当した私は、自由遊びの時間にホチキスや折り紙が使える制作コーナーを設けた。すると、自然と「やりたい!」という声が広がり、子どもた

ちの創作意欲が高まった。ホチキスから始まり、切り紙ブームへと発展し、難易度の高い作品にも挑戦する姿が多く見られた。

活動はあくまでも自由参加であったが、子どもたちは自分のペースで工夫を重ね、様々な作品づくりを楽しんだ。途中で、葛藤も生じた。例えば、使える折り紙の枚数について、制限をなくしたい気持ちはあるものの、園にある数には限りがあるため、1枚ずつ丁寧に使ってほしいという願いが生じた。そこで、折り紙を1日1枚というルールを作ったところ、2枚必要な時は、1枚目が完成したらお道具箱に入れ、次の日に続きをするなどの様子がみられ、物を大切にしながら楽しむことができていた。また、クラスが変わっても、レベルアップした作品を見せに来てくれたり、クラス単位での活動になっていたりと、遊びが続いている様子から、子どもにとってよい経験として根付いていることを嬉しく思った。

今後も「できない」をそのままにするのではなく、「どうすれば楽しくできるようになるかな？」という視点を持ち、子どもたちの「やりたい！」という気持ちを引き出せる保育を心がけていきたい。そして、「できない」が「やりたい」に変わる、その瞬間を大切にしていきたいと強く感じている。

(4) グループワーク

発表会場では、実践紹介の合間に約15分ずつ、計3回のグループワークを行った。各グループでは提示されたテーマをもとに、日頃の保育の中で感じている課題や疑問、共感できる点、さらに自園で取り入れられそうな工夫などについて活発に意見を交わした。グループごとに出された意見や考えは配付用紙にまとめていただき、最後に発表者へ提出してもらった。これらのメモは、現場の保育者が抱く生の声や実践の知恵を集約した貴重な資料となった。



2. 今後の課題

発表を終えた後は、グループワークで集まった意見や提案を整理し、カンファレンスの場でさらに検討を重ねていく予定である。そこでは、実践の場で直面している具体的な課題と照らし合わせながら、よりよい保育実践につながる具体案を導き出していきたい。そして、考え出した案を実際の保育に取り入れ、その成果や課題を振り返りながら改善を続けていくことで、子どもにとっても保育者にとってもより充実した保育環境を築いていくことが求められる。

以上